

西の菜時記

特集：徳地和紙 紙すき体験・おごうさん生誕100年

山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360

平成29年10月20日発行
第46号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

高杉晋作の鯛好きは有名です。正妻まさきによると晋作は鯛の白身ばかりで作った押し寿司と鯛のあら煮が好きだったとのこと。晋作は愛人おのにも作らせていて、鯛のお造りと骨付きの身を塩煮したものを、結

ろに益次郎が今に通じる居酒屋メニューを食べていたことになり、江戸時代後期に「豆腐百珍」という料理本が出ていてアレンジ料理が充実していたようです。

禁門の変の後、木戸孝允が但馬出石に潜伏していたときは、揚げ豆腐を焼いたのを好んで食べていたとか、大酒飲みで知られる周布政之助が酒のアテに焼いた油あげを食べていたなど豆腐やその加工食は幕末の人たちの大事なタンパク源だったようです。「そうせい公」こと長州藩主毛利敬親の食事には毒見が3回もあり、温かいものが食べられませんでした。ところが、次の毛利元徳の代に「湯豆腐は鍋から食べるから毒見はよからう」と言われたこともおもしろいエピソードです。

鯛男子



食にまつわるエピソード約30話。11月末まで展示中です。

山口の歴史 幕末志士の大好物 知られざる食生活

平成29年9月から11月まで企画展「山口の歴史」として江戸時代末期、幕末志士の大好物を紹介しています。

豆腐男子

大村益次郎の「豆腐好き」は有名です。江戸にいたころの益次郎の買物通い帳の記録（請求書）は、ほとんど酒と豆腐がしめています。また、「小口ねぎとすりおろし大根をのせた揚げ出し豆腐は最高！」とのメモも残っており、江戸で過ごしたころに益次郎が今に通じる居酒屋メニューを食べていたことになり、江戸時代後期に「豆腐百珍」という料理本が出ていてアレンジ料理が充実していたようです。

核で倒れたあと度々食べたと言われています。鉄分たっぷりの青魚が好物だったら、もう少し長生きできたかもしれません。

伊藤博文が解禁した「フグ」ですが、実は武士以外の庶民はすでに食べていたそうです。武士は食あたりで死ぬことを恥じて食べなかったそうで、高杉晋作も山縣有朋もあえて食べませんでした。

スイーツ男子

品川弥二郎は、大の甘党でした。幕末、上京する道中で茶店があればお菓子を買って駕籠の中で食べていました。同行していた足軽仲間がそれを見かねて一切のお金を預かったのですが、こっそり駕籠かきからお金を借りて買って食べたそうです。

吉田松陰も甘党でよく大福もち（今のあんこが入った草餅を食べました。松陰はお酒が飲めなかつたので大福もちで糖分補給。「花燃ゆ」とき妹ふみが兄のために大福もちを作るシーンが幾度か登場しました。

菜香亭の名付け親井上馨は、袖解橋の遭難で瀕死の重傷を負いました。高杉晋作が見舞いに来てくれたとき、「私はただただみかん汁を吸って生き延びていた」と回想しています。

「スイーツ（酸い／＼）」と、思ったかどうか分かりませんが、ビタミンCが治療に効いたのでしょう。



企画展「山口における高杉晋作」より イラスト：taeco



国立国会図書館蔵

品川弥二郎(1843-1900)は、松下村塾で学び、尊王攘夷運動に奔走。薩長同盟のときには、京都へ行く木戸孝允に同行したり、戊辰戦争のときには戦況を有利にした「錦の御旗」の製作を指揮し、当時の応援歌のようなトコトンヤレ節の作詞をしたことでも有名。明治以降は新政府に仕え、信用組合や農業協同組合(今のJA)の設立の礎を築きました。

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

<市民ギャラリー出展作品の紹介>

第4回 ふたりっこ制作展 in 山口
—向田秀俊・向田美保— 7/27~7/30



いぬのはなし PartⅢ in 山口
—三浦和誇— 8/11~8/13



創作展・有趣—Omomukiari—幕末維新をテーマに
—防長史楽会— 8/25~8/27



私を感じた山口のステキ♡~
—眞木由紀と仲間たち— 9/6~9/11



<平成29年度 市民ギャラリーの予定>11・12月

| 月日 | 時間 | タイトル | 主催者 |
|--------------|--------------------------|--|-------------------------------|
| 11/2 ~5 | 10時~17時 | 山口の風景、日本の風景、世界の風景イラスト展 | 古谷眞之助 |
| 11/16 ~20 | 10時~17時(最終日のみ16時まで) | Citta~わたしの街~ 山口×スポレート(イタリア) | ピピリ・ロベルト フェデリコ・ジェンティ ーリ |
| 12/13 ~17 | 10時~17時(初日13時~、最終日16時まで) | 第2回カメラ片手に漫ろ歩き ~山口市シルバー人材センターパソコン 班写真展~ | シルバー人材センター パソコン班 |

出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。

(お問い合わせ) TEL:083-934-3312

FAX:083-934-3360

露山堂と萩明倫館萬歳橋の角形灯籠

香山公園にある露山堂は、元々は毛利敬親公が山口新屋形を建設した元治元年(1864年)に、現在の県庁の一露山(丸山と呼ばれており、昭和59年に現在の県庁舎が建設される際、整地され県警本部庁舎や駐車場となった。)の麓に茶室として設けられたものです。

敬親公は茶道を趣味としており、萩城跡にある「花江茶亭」で、茶室だけは例外として身分に関係なく家臣を招き入れ、茶を飲みながら意見交換をしていたと言われています。

露山堂でも同様に敬親公は、小田村伊之助(楯取素彦)など主だった家臣を招き入れ、倒幕の密議を凝らしたと言われています。

廃藩置県後、他に移築されたりして老朽化が著しく、品川弥二郎が来山した際、荒廃している露山堂を見て、有志を募り移転費用を集め、明治24年(1891年)4月に現在地に移築されたものです。

現在の露山堂横手の小庭にひっそりと小さな石灯籠が建っています。市報やまぐち「幕末維新山口ものがたりNo3(2017年7月15日発行)」には「角形石灯籠—これは、以前萩の明倫館の聖廟の前の堀に架かっていた石橋の柱だったと言われています。側面に文字が残っており、萬歳橋(ばんせいばし)と書いてあるのが読み取れます。」と紹介されていました。

萬歳橋そのものは現在、萩城跡にある志都岐山神社(しづきやま)の前の池に架かっています。その萬歳橋の石柱が何故現在の露山堂の小庭に移転されているのか、資料が残っておらずよく分かりません。

しかし、藩校萩明倫館も敬親公が嘉永2年(1849年)に萩城三の丸から現在地の江向に移転・拡張し、多くの維新の人材を輩出したものであり、その明倫館にあった萬歳橋の石柱もどこかに散在していたものを惜しみ、敬親公ゆかりの露山堂の小庭に一緒に移転したものである。

この小庭にある苔むした石灯籠を見ていると、弥二郎達の敬親公への崇敬の念が伝わるとともに歴史の流れを感じる思いがします。



露山堂におかれて左横にポツリと立つ石灯籠。よく見ると「萬歳橋」と刻まれているのがわかります。